

三郷村の埋蔵文化財第1集

黒沢川右岸遺跡

1988・3

三郷村教育委員会

黒沢川右岸遺跡

1988・3

三郷村教育委員会

序

今回の黒沢川右岸発掘調査は降ってわいたような話であった。

ここに建造物ができるということは、既に整地のための機械が入って作業が始まろうという段階で初めて教育委員会が把握するというありさまだった。

従って事業主が、建造のスケジュールも決定している中で、その作業を中断して発掘調査を実施するという緊急事態を事業主に理解して戴き、協力を得るまでには、想像以上の努力が必要であった。

また、発掘調査に当たる、考古学者、学術研究者等その途の権威者の多くは、高速自動車道長野線工事にともなう緊急発掘調査が急テンポで進行していて、それに動員されているという状況下で、こちらの発掘調査に参画していただくことは容易なことではなかった。

しかし、この苦衷に同情理解していただき、校務多端の中にもかかわらず、山田瑞穂先生、百瀬新治先生はじめ多くの方々のご協力によって、発掘調査団を結成することができたのは感謝にたえないところである。

また、村内各層にわたっての調査協力者を迎えることができ、いよいよ発掘に取りかかると、作業は順調に進捗して昭和58年9月3日に着手した発掘作業は25日間で9月27日には発掘を完了することができた。

この調査の結果は、縄文・弥生向時代の住居址が多数発掘されるとともに土器・石器も多量に発見され、また、ニホンジカの骨片・角片、ナラ材・クリ材の炭、ミズナラのドングリなどが発掘された。

特に南安曇地区での弥生時代の住居址が発掘調査されたのはこれが初めてであるということで、他地域との比較研究の端緒を開いた意味は大きいと思う。

この報告書の発行に当たり、発掘調査、報告書作成にご尽力いただいた山田瑞穂調査団長、百瀬新治調査員はじめ多くの調査員、調査協力者等関係者に衷心より感謝を申しあげるとともに、印刷製本等に優秀な技術と誠意をもってあたられた、ほおずき書籍館に対し、厚く御礼を申しあげる次第である。

三郷村教育委員会

教育長 水谷 富保

例 言

- 1 本書は、社会福祉法人老人ホームに伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2 遺跡名は、名称としてはやや不適切であるが、周知の「黒沢川右岸遺跡」をそのまま踏襲した。
- 3 調査は、三郷村教育委員会が調査団を組織し実施した。
- 4 本書の執筆は調査団で決定した分担によって行い、各文末に氏名を明記することにより文責を明らかにした。編集は山田・百瀬・島田が行い、山田が監修した。
また、本書作成における分担は下記の通りである。
遺構図整理・トレース……山田・百瀬
遺物整理 ……山田・百瀬・島田・降旗
遺物実測・トレース ……百瀬・島田・平林・降旗
写真 ……山田・百瀬
- 5 本書を作成するにあたり、以下の各氏の御協力・御助言を得た。記して感謝申し上げる。
神村 透・桐原 健・笹沢 浩・青沼博之・石川日出志・百瀬長秀・市沢英利・大竹憲昭・望月 映・野村一寿・福沢幸一
- 6 掲載した実測図は、特にことわりのないかぎり、つぎの縮尺による。
遺構 1 : 60
遺物 土器 1 : 4 (拓影 1 : 3)
石器 1 : 2、2 : 3
- 7 調査の諸記録および遺物は三郷村教育委員会において保管されている。
- 8 土器実測図・拓影中、織維土器はその断面を白抜きし、無織維土器は塗りつぶすことによって区別した。

本文目次

序

例 言

第1章 発掘調査の経過

第1節 調査にいたるまで	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査の経過	3
第4節 調査の方法	3

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境と土層の状況	5
1、本遺跡付近の地形と地質	5
2、本遺跡の地形、地質について	5
3、竪穴住居址と土層との関係	6
4、当時の自然環境について	6
第2節 歴史的環境と村内の遺跡	7

第3章 遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物	9
1、第3号住居址 (1) 遺構 (2) 遺物	9
2、第2号小竪穴 (1) 遺構 (2) 遺物	13
3、第2号住居址 (1) 遺構 (2) 遺物	17
4、遺構外出土の遺物 (1) 土器 (2) 石器	20
第2節 弥生時代の遺構と遺物	23
1、第1号住居址 (1) 遺構 (2) 遺物	23
2、第4号住居址 (1) 遺構 (2) 遺物	29
3、第7号土壇 (1) 遺構 (2) 遺物	33
4、遺構外出土の遺物 (1) 土器 (2) 石器	37
第3節 その他の遺構と遺物	38
1、第1・2号集石	38
2、第1号小竪穴	39
3、第1～6・8号土壇	39

第4章 結 語	40
---------	----

挿図目次

図1	調査範囲と遺構全体図	4
図2	土層概念図	5
図3	遺跡土層断面概念図	6
図4	三郷村の遺跡分布図	8
図5	第3号住居址実測図	9
図6	第3号住居址出土土器拓影(1)	10
図7	第3号住居址出土土器拓影(2)	11
図8	第3号住居址出土土器実測図(1)	12
図9	第3号住居址出土土器実測図(2)	13
図10	第2号小竪穴出土土器実測図	13
図11	第2号小竪穴出土土器拓影(1)	14
図12	第2号小竪穴出土土器拓影(2)	15
図13	第2号住居址・2号小竪穴実測図	16
図14	第2号小竪穴出土土器実測図	17
図15	第2号住居址出土土器実測図	17
図16	第2号住居址出土土器実測図	18
図17	遺構外出土土器拓影	19
図18	遺構外出土土器実測図(1)	20
図19	遺構外出土土器実測図(2)	21
図20	第1号住居址実測図	22
図21	出土土器実測図	24
図22	第1号住居址出土土器拓影(1)	25
図23	第1号住居址出土土器拓影(2)	26
図24	第1号住居址出土土器実測図	27
図25	第4号住居址実測図	29
図26	第4号住居址出土土器拓影(1)	30
図27	第4号住居址出土土器拓影(2)	31
図28	第4号住居址出土土器拓影(3)	32
図29	第4号住居址出土土器実測図(1)	33
図30	第4号住居址出土土器実測図(2)	34

図31	遺構外出土土器拓影(1).....	35
図32	遺構外出土土器拓影(2).....	36
図33	遺構外出土土製品・石器実測図.....	37
図34	第1号集石出土土器拓影.....	38
図35	小竪穴・土壌実測図.....	38

図 版 目 次

図版 1	遺跡全景・トレンチ調査風景
図版 2	3号住居址・1号集石
図版 3	2号住居址・2号小竪穴
図版 4	1号住居址・4号住居址
図版 5	1号小竪穴・7号土壌・3号住居址埋甕
図版 6	出土土器
図版 7	遺構外出土縄文土器
図版 8	1号住居址出土土器
図版 9	4号住居址出土土器
図版10	遺構外出土弥生土器
図版11	出土石器
図版12	石器・土製品・その他

事務局 大藏喜雄 (教育委員会・教育次長)

増田誠子 (" 係長)

大倉正隆 (" 主事)

生松文子 (" 主事)

務台一之 (" 主事)

松岡 寛 (" 主事)

大向弘明 (" 主事)

調査協力員 小松明夫、小松牧俊、丸山玄久丸、二木秀雄、矢野口佳郎

中村太一、降旗政人、筒井範雄、高島孚、丸林一之

降幡 章、丸山善太郎、池上 康、布山靖行、丸林一孝

三澤 勇、石曾根正明、小林 伝、務台正輝

畑中章雄、安坂光代、小松 文、中村 浩

中田 誠、降幡英樹、久保田育美、千国範子

布山順子、高木 亮、中村一隆、保崎 健、植原脩市

萩原昭平、小穴広志、野本幸稔、柴野取三郎

宮澤豊弘、降幡俊一、磯野 晟、浜 英章

鳥原寛海、木藤 等、三澤賢二、飯沼賢一

丸山芳夫、夔 信、遠藤武寿、務台正治

小穴典夫、宮島茂夫、佐久間友美、布山茂正

務台美知子、那須野雅好、赤澤哲也、水谷 茂

高橋孝栄、中村 栄、木内美すゝ、岩岡千佐子

二村正子、野本清隆、高橋利実、近藤智子

保崎健文、高嶋俊明、堀内直久、小松久芳

小松孝彰、小穴久雄、宮澤慎二、赤羽 篤

帯刀淳治、西澤泰彦、松尾文夫、飯田弘一

増田英紀、布山昌徳、二木睦雄、中村芳朗

横澤 隆、小山さよ子、橋枝玲子、千国むつみ

小・中学生 千国雄一郎、中村洋一、宮坂百代、桑原未紀

久保田直樹、阿部 学

第3節 調査の経過

- 9月3日(土) 作業員23名。A・B・C区に2mおきに2×2mのトレンチ設定。スコップ又は
晴 じょれんを使い表土除去。
- 9月4日(日) 作業員32名。継続作業。土器片つきつき出土、活気づく。
晴 Aトレンチに住居址らしきものと土器の一部がのぞく。
トレンチ拡張する。
- 9月8日(休) 今日から役場職員を動員。本格的作業開始。作業員41名。見学者15人。
晴 今朝より作業用具、器材等搬入。テント2張設営。
D・E・Fトレンチ設定、掘り下げる。午後からベルトコンベアーを導入し作業
の能率を図る。Aトレンチに1号住居址検出。弥生式土器出土。
Cトレンチに2号住居址掘り下げ。2号住居址に縄文式土器出土。
- 9月9日(金) 作業員35名。見学者9人。ベルトコンベアー使用。
晴 1号住居址完掘。2号住居址完掘。Dトレンチに3号住居址掘り下げ。
- 9月10日(土) 作業員31名。見学者12人。
晴のち曇 1号・2号住居址写真撮影と実測。3号住居址完掘、写真撮影と実測。2号住居
址横の小穴完掘。
Aトレンチの4号住居址掘り下げ。Fトレンチ拡張。
- 9月11日(日) 作業員21名。見学者6人。
曇のち小雨 2号住居址実測。4号住居址完掘、写真撮影と実測。Fトレンチから第1・第2
集石検出。写真撮影と実測。土壌1～5完掘。
森義直先生により地質調査がされる。
- 9月13日(火) 土器洗い 作業員6名
- 9月14日(水) 土器洗い 作業員8名
- 9月24日(土) 土器整理 作業員5名
- 9月26日(日) 土器整理 作業員3名
- 9月27日(月) 土器整理 作業員2名
- 以後報告書刊行に向けての作業にはいる。

(増田誠子)

第4節 調査の方法

遺跡の状況などがまったくわからないので、まず調査地区全体にかかるように幅2mのトレンチ(A・B・C・D)4本を設定し、遺構の分布状況および土層の状況を把握することにした。その結果、縄文時代から弥生時代にかけての遺構が、竪穴住居址4軒を含みかなり濃密に分布すること、戦争中の松根油採取のための抜根跡をはじめ本工事を含めての擾乱が激しいこと、そのためもあって明確に遺構切り込み面がつかめないことなどが判明した。

この結果をもとに、さらにトレンチの間に2本の新たなトレンチ(E・F)を設け、遺物の出土の多いAトレンチには南側に拡張トレンチを設定した。そして、トレンチにかかった遺構に

については、その周辺を拡張することによって、遺構全体を調査するとともに切り合う遺構の有無を確認した。したがって、結果としては調査地区の全域に調査の手が及んだと考える。切迫した状況のなかで、このような方法が最善と考え実施した。

測量は平板測量を原則とし、一部遠り方測量を用いた。また、各トレンチは2mごとに区切って番号を付すことにより、測量と遺物の取り上げの基準とした。 (百瀬新治)

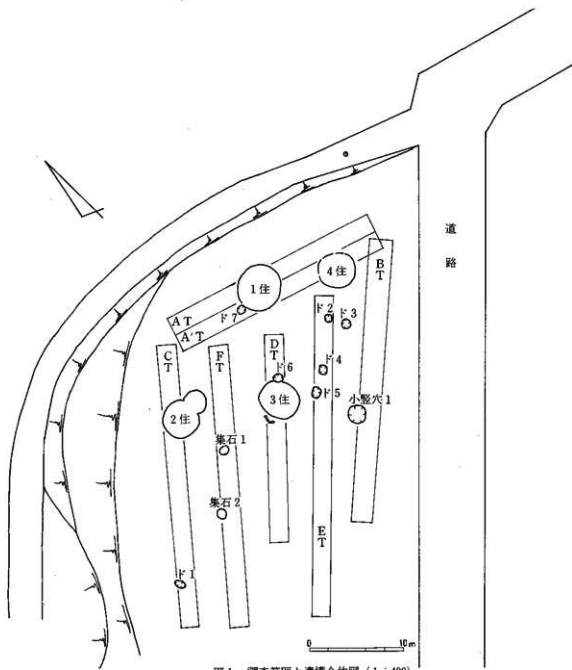


図1 調査範囲と遺構全体図 (1:400)

第2章 遺跡周辺の環境

第1節 地理的環境と土層の状況

1、本遺跡付近の地形と地質

本遺跡は松本盆地の西山麓で、黒沢川により形成された扇状地の右岸、海拔680m前後のところに位置し、現黒沢との比高が5.5m～6mの段丘肩の付近にある。この付近は隣接して烏川扇状地、その北には中房川扇状地などフォッサマグナ西縁の山麓沿いに数多くの扇状地が分布しているが、これ等扇状地の基底となっている礫のうち安曇野北部は高瀬川によるものであり、黒沢川や烏川などの安曇野南部は、梓川による礫である。これ等の上に小扇状地の堆積物が乗っている。本遺跡のある黒沢川扇状地は、海拔640m付近を境にして堆積状態が異なり、これより高所では、西側の山地の隆起運動の影響を強く受けて扇状地も隆起し、その分だけ黒沢川による下刻作用も進み、本遺跡付近のような段丘崖を形成するに至っている。堆積物は古生層の岩盤の上に梓川の堆積物、黒沢川の堆積物、そしてロームの順になっている。640m付近より下流では、側方浸食が盛んで川巾も広く、氾濫をくり返し梓川の影響を強く受けて左折している。堆積物は下から順に、乗鞍の輝石安山岩を含む梓川の円礫が厚く堆積しその上に、ロームが乗っているが一部は黒沢川の古期堆積物とロームが互層をなして乗っている。このロームの乗った上野段丘面を黒沢川の新しい堆積物が覆い、同段丘は上長尾付近で黒沢川扇状地に埋没している。

2、本遺跡の地形、地質について

発掘地点は黒沢川扇状地中腹部より上部の海拔680m付近にあるため、黒沢川による下刻作用が進み、現河床との比高は前述した如く5.5m～6mあり、河床近くには新しく比高0.5m程の小段丘ができてつある。遺跡はこの6m程の段丘崖の肩の付近にあり、堆積物は地形からみて、おそらく古生層の岩盤と黒沢川扇状地堆積物の間には、梓川の堆積物が存在すると推定されるが、遺跡で確認した範囲では別図の如く、黒沢川起源の硬

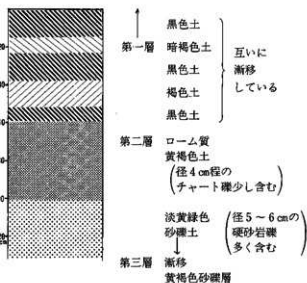


図2 土層概念図

砂岩の角礫が多く次いで赤色チャート、青色チャートの角礫、粘板岩の角礫の順となり全て古生層のものである。角礫ではあるがおよそ ϕ 5~6cmを中心に小角礫から大角礫まであり、その間を粗砂が埋めている。これ等の砂礫層の上部は淡緑色を帯びた黄色の砂礫となり、その上をロームが段丘崖に近い程度厚く覆っている。表土はローム起源の黒ボカ土であるが、有機物の寡多により黒色~褐色と変化に富み層状をなしている。これ等の土層は走向N40°E傾斜はNW方向に約10°傾いている。即ち、黒沢川の方に10°傾いていることになる。なおローム中にチャートの ϕ 4cmくらいの礫が少々混在していることから、横への移動も考慮しなければならないが、おおむね洪積世末の堆積と考えられる。

3、竪穴住居址と土層との関係

竪穴住居の床面は、段丘崖に近い西側の住居はロームとなっており、東側の住居は、ローム層が西に厚いため床面の西側半分がロームで、東側半分はローム層を掘り抜き淡緑色を帯びた黄色砂礫層がでている。竪穴を埋没させた土は黒褐色土であることから、現表土の下部が当時の生活面であったと推定される。

4、当時の自然環境について

当時の自然環境を知る手立てとして、遺跡出土の炭化物、骨片などから推定すると、

- 4号住居址……ニホンジカの骨片、角片
(弥生時代中期)
- 集石1……ナラ材の炭、骨の細片
- 集石2 クリ材とナラ材の炭多数(クリの方が多い)

ミズナラのドングリ……1ヶ

以上となっている。

遺跡の時代は一定ではなく新旧の中がありながらも自然環境は殆ど同じで、同時代の松本盆地一般の出土炭化物と共通し、縄文末~弥生初めにかけてクリ、ナラ(コナラ、ミズナラ)の落葉広葉樹が中心となっており、ニホンジカも多かったと推定される。本遺跡からは出土しなかったが、この付近の同時代の炭化物には、トチ、クルミ、ケヤキなどの落葉樹とマツ以外の針葉樹が少々出土している。

なお焼骨片には大形鳥類やイノシシが混入することもある。

(森 義直)

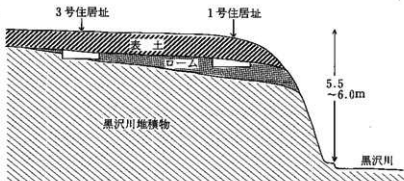


図3 遺跡土層断面概念図

第2節 歴史的環境と村内の遺跡

三郷村には「三郷村誌」によると古墳らしきものも含めて、47個所の遺跡が知られている。段丘下の水田地帯にも遺跡の所在が確認されているが、その多くは、山麓沿いと黒沢川の両岸沿いに密集するという分布がみられる。そしてこの密集地域は縄文期の遺跡が圧倒的に多いという特徴を示している。

黒沢川沿いの遺跡をみると、上流から、左岸では、黒沢浄水場東、南松原(村誌の室山南を含める)、東小倉(村誌、黒沢川左岸を含める)、三角原の各遺跡が、右岸では、押込(梓川村中塔)、長者屋敷(梓川村境界)、稲荷西、調整池北、黒沢川右岸、チンクラ屋敷、若宮、堂原等の各遺跡が続いている。また黒沢川の氾濫延長上の上長尾、楡、住吉部落に存在している各遺跡も、かつて黒沢川の小自然流の流路に沿ったものと考えれば、広い意味では黒沢川沿いの遺跡と言える。昭和24年の楡道下遺跡(当時は及木遺跡と呼んだ)の発掘調査では、それを示すかのような自然流の堆積が観察されている。

この黒沢川周辺に人々の往来があったのは、縄文時代の早期にまでさかのぼる。楢岡押型文土器片を出土した稲荷西と本遺跡である。次いで縄文前期には、本遺跡、調整池北、東小倉、黒沢浄水場東の各遺跡がある。調整池北遺跡は本遺跡の上流地続きであり、繊維を含む縄文土器片を共に出土して、本遺跡との関連性がみられる。東小倉遺跡は、前期から晩期に及ぶ内容を持つ遺跡で三郷村では注目すべき遺跡の一つである。前期の内容は有尾式、上原式、下島式土器片であるが量的には多くない。やはり中期遺物が圧倒的に多く、中期の集落であり、土偶、有孔大珠に優品がある。黒沢浄水場東遺跡は下島式土器を出土する小範囲の遺跡であったが圃場整備事業で消滅してしまった。また前期では鳴沢川沿いの北小倉才の神遺跡は、有尾式、北白川下層式土器を出土して注目される他に後・晩期までの内容を持つ遺跡として特筆されるものである。

中期になると他地域と同様に最盛期を迎え、本格的な村作りが始まって、その集落が、長者屋敷、南松原、東小倉の遺跡にみられる。南松原遺跡は昭和45年に発掘調査され、遺跡範囲の一部分の調査であるが、14軒の住居址の存在を確認している。勝坂期が中心をなすものであり、東小倉遺跡より先行する内容を持っている。共に広範囲からの遺物の出土があって、大規模な集落が考えられる。東小倉遺跡は打製石斧の多いことが注目される。後・晩期になると東小倉遺跡が注意される程度で、全盛を極めた中期文化も次第に衰退の様相を示している。

次いで弥生時代を迎えると南安曇郡下では他地域に先がけて本遺跡と堂原遺跡にその文化の伝来をみている。しかし後続しないで終わってしまっている。これから黒沢川流域に人々の生活がしばらくの間とだえるが、古代にいたって、三角原、楡小路、楡中村、楡上手、楡道下、住吉丁田等に居住がみられる。水田地帯となっている沖積地であるが、黒沢川の川尻に当たり、黒沢川の小支流のあった地域と考えられるところである。平安期の遺物を出す遺跡が多く、住

吉庄開発の歴史を考える上で大切な遺跡群であろう。

また東小倉遺跡内に入るアルプス学園前に古墳と呼んでよいのか躊躇するような小古墳があり、昭和25年に調査されている。

以上黒沢川右岸遺跡を中心とした黒沢川沿いの遺跡に限って列記したが、先記のように三郷村では遺跡の密集する地域である。これは黒沢川の水が人々の生活にとって必要なものであったことと、両側に展開する広大な扇状地は食料獲得の地として極めて重要であったからである。特に採集生活を中心とする縄文時代においてはそのことが強くうかがわれる。しかし稲作を中心とする弥生時代以降においては、多孔質の扇状地は水もちが悪くて水田耕作には適さないため、順次沖積地域への進出がなされたものとみることができよう。(山田瑞穂)



1. 黒沢川右岸 2. 黒沢川浄水場南 3. 南松原 4. 黒沢川左岸 5. 長者屋敷
6. 稲荷 7. 調整池北 8. チンクラ屋敷 9. 若宮 10. 衆原 11. 上総園敷
12. 栗の木下 13. 三角原 14. 丁田 15. 檢上手 16. 檢中村 17. 檢小路 18. 檢道下 19. 坂がいと 20. 二木神社東 21. 白山神社横 22. 一日市場郵便局南
23. 長尾城址北 24. 赤坂西 25. 住吉竹原 26. 鳴沢尻 27. 一本松 28. 鳴沢
29. 才の神 30. 堀尻 31. 地蔵沖 32. 西牧 33. 大塚 34. 浄心寺南 35. 堂屋敷
36. 山の腰 37. 大日堂北 38. 中沢 39. ゆの久保 40. 北小倉古墳群 41. 浄心寺南古墳群
42. アルプス学園前古墳 43. 平福寺付近古墳

図4 三郷村の遺跡分布図 (1:50,000)

第3章 遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物

1、第3号住居址

(1) 遺構

本址は、第2号住居址の東方に位置して確認された堅穴住居址である。Dトレンチ掘り下げ中に、D-5区から配石と共に黒褐色土の落ち込みを認めたので拡張したところ、楕円形プランを呈することが容易に把握できた。

検出された本址は、おおむね南北方向に長軸をとる楕円形で、南北4.75m、東西3.8mを測る規模を有する。黄褐色を帯びる砂質ローム土が確認面となり、それから床面までの掘り込みは25～35cmであり、壁面は北半分が概して急傾斜、南半分が緩傾斜をなしている。

床面は西から東へわずかに傾斜をもっている。床面中央やや東寄りに炉址と思われる焼土があり、これから北半分は平らで検出もしやすかったが、南半分のP₃の周辺は相当に攪乱もあって

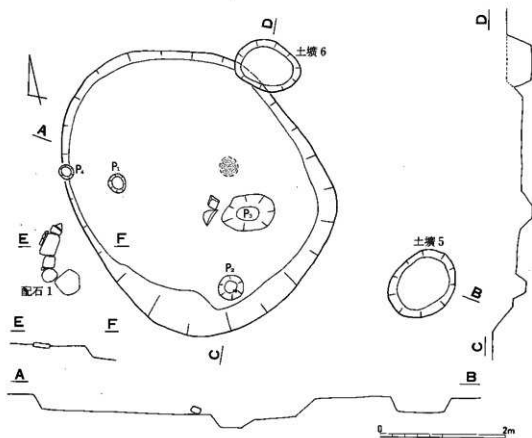


図5 第3号住居址実測図

床面は荒れた状態であった。床面にはP₁からP₂までの掘り込みがあり、P₁（径30cm、深さ25cm）、P₂（径40cm、深さ20cm）は、西壁に穿たれたP₄（径25cm、深さ18.5cm）と共に柱穴としての

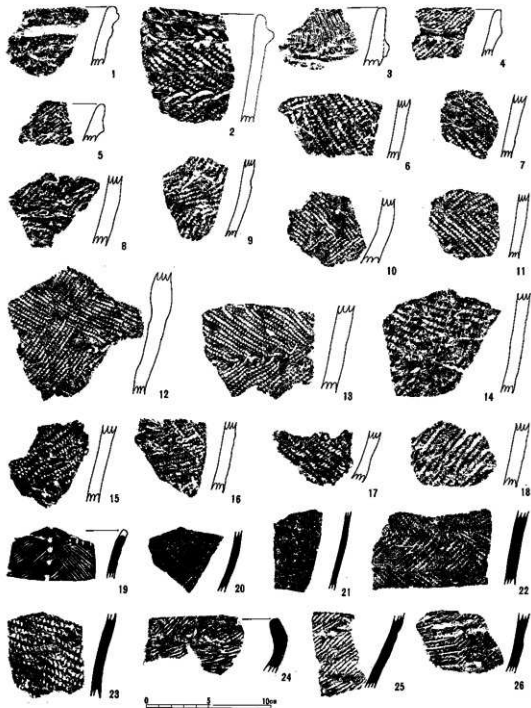


図6 第3号住居址出土土器拓影1)

機能をもつものであろう。P₃ (85×60、深さ16cm) は発掘時に注意して精査されずに進行してしまっただが、出土遺物(下島式土器片)の集中出土と攪乱状態から考えて、本址埋没後に掘り込まれた土壌ではないかと思われる。炉址と思われる焼土は径30cmの範囲で約5cmの厚さに焼けていた。焼土の南西には炉石に使ったのかどうかは不明であるが焼けた石が2個床面に接して検出されている。

本址に接して、北壁には土塊6が掘り込まれている。本址以後のものである。西壁外には本址発見の契機となった配石1がある。6個の上面が平らな石を「L」字状に配したもので、本址に伴うものかどうか判断しがたい。またその性格も不明と言わざるを得ない。類例の集積を待って検討したいものである。

(2) 遺物

出土遺物には土器片と石器がある。土器片は出土量もさして多くはなく、器形のわかるものはない。

図6-1は黄褐色を帯びた、もろい焼成の口縁部片で胎土に多量の繊維を含んでいる。断面をみると器壁の表面部は黄褐色をしているのに対し内部は黒色である。口縁部に二本の隆帯をめぐらしているが磨滅のため以下の文様はわからない。2、4-8は縄文を施したものでいずれも胎土に繊維を含む。2は口縁部に沿って一本の隆帯をもつもので口唇部とこの隆帯上に刻み目が施されている。口縁部から胴部にかけては羽状縄文がみられるもので、黄褐色を呈して焼成はややもろい。口縁部はやや傾斜がみられることから波状をなすものと思われる。3は、繊維

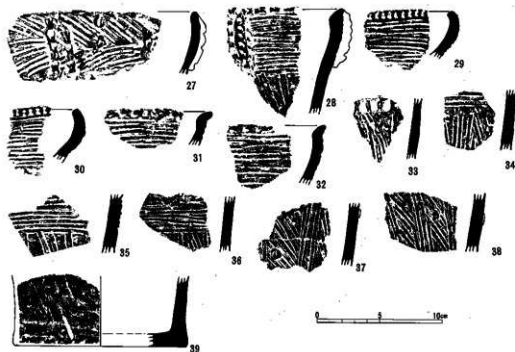


図7 第3号住居址出土土器拓影(2)

を含む口縁部片で、隆帯がめぐっており口唇部にかけて摺承文がつけられている。また隆帯上にもその圧痕がみられる。出土量は少ないものである。19～21は「おせんべい土器」と呼ばれる一群で東海系の土器である。灰色を帯びた薄い器厚がその特徴となっている。19は口唇部に突起をもつ口縁部片で、突起の頂上から器内側に長い刻み目を施してある。また口唇部にも刻み目がつけられ、器表面には条痕文があり、突起から下に刺突文もみられる。以上の土器はいずれも縄文前期初めに比定される土器である。

次に図7-27～39は第3号住居址として取り上げ、処理してしまったが、P₃の土壌出土遺物とみたい。いずれも半截竹管工具による平行条線文が施された縄文前期末にあたる下島式土器である。27～32は口縁部片で、内湾する器形をとるものと外反気味のものとはみられる。27、28には条線上に粘土紐を貼り付け、その上に刺突文を付けてある。29～32には口唇部に沿って同様な刺突文がみられる。また27、37、38のようにボタン状突起をつけ、その上に刺突文をつけたものもある。図6-22～26は、縄文を施したもので胎土に繊維を含まない。24は内湾する口縁部片であり、これらは1～21の土器とは時間差がみられる。下島期の土器と組になる縄文ではないかと思われる。なお39の底部片は胎土、焼成からして22と同一個体ではないかと思われる。底径約14cm程で垂直に近い立ち上がりをもせており、成形時の擦痕がみられるだけである。

石器には図8-1～3の石鏃と4の石錐、5の石匙がある。石匙は床面出土であるが、石鏃、石錐は覆土よりの出土である。石質は黒曜石製が1、3、4、チャート製が2、5である。図示しなかったが黒曜石製のスクレーパーも覆土より出土している。また図9に示した横刃形石器1～3、6、剥片石器4、5、7、凹石8がある。石質はチャート製が3、4、7、粘板岩製が1、2、5、6、凹石は花崗岩製である。

(山田瑞穂)

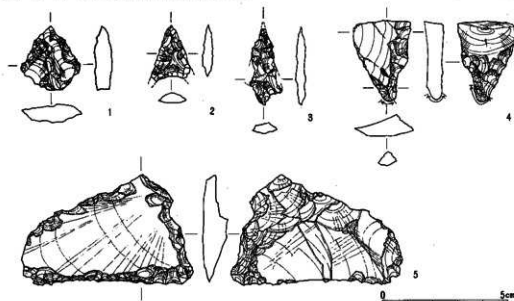


図8 第3号住居址出土石器実測図(1)

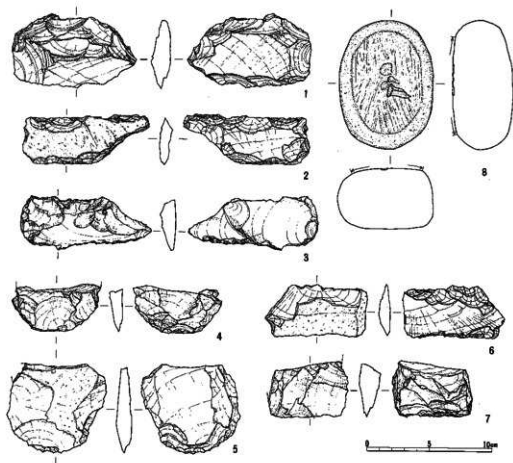


図9 第3号住居址出土石器実測図(2) (1:3)

2、第2号小竪穴

(1) 遺構

調査区北側、段丘端部に位置する。ローム層上で検出され、2号住居址に切られている。プランは三分の一を2号住居址に切られており、はっきりとしなが、 $3 \times 2.5\text{m}$ の楕円形を呈するものと予想され、小竪穴というよりは、住居跡といった感じである。壁高は平均20cmで、床面はほぼ平坦で、全体的にとても堅い床面であった。床面上には柱穴と思われるピットが1ヶ検出された。床面上にはこの他の施設は検出できなかった。

遺物は床面上及び裡土内に散在しており、完形品はなくすべて破片であった。

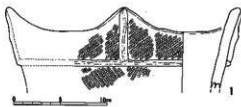


図10 第2号小竪穴出土土器実測図

(2) 遺物

土器が多くをしめ、石器は青色チャート製のスクレイパー1点のみで、この他にチャートの剥片が1点出土している。土器はすべて胎土に繊維を含んでおり、無繊維の土器は一点も認められなかった。1～9は、単筋の縄文を地文とした深鉢の口縁部で、5には口縁端部に縄文が施文され、6・7には棒状か竹管により刻みが施され、8・9には口縁部に隆帯が貼付されている。

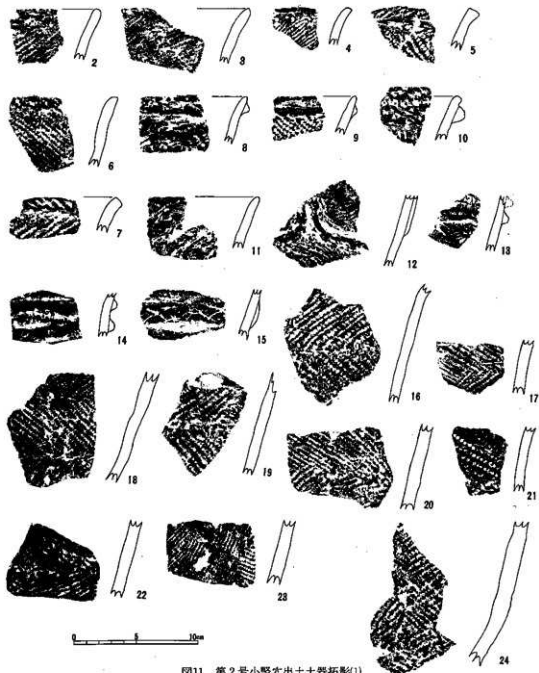


図11 第2号小竪穴出土土器拓影(1)

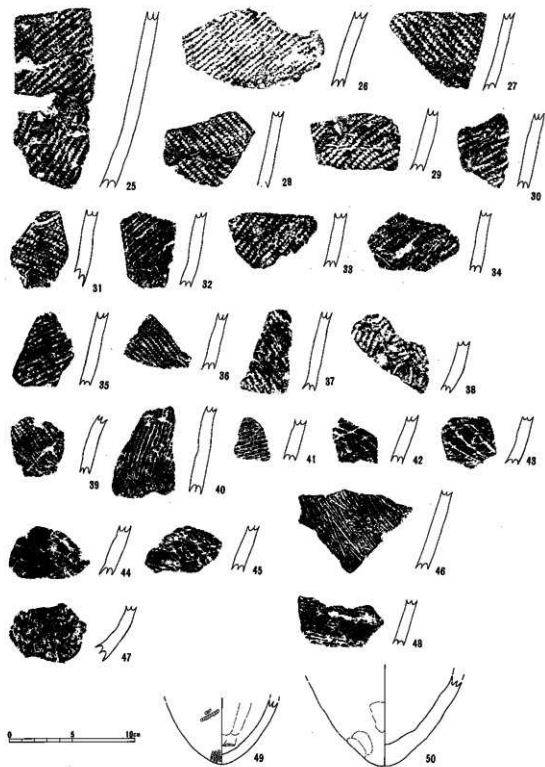


图12 第2号小墓穴出土土器拓影(2)

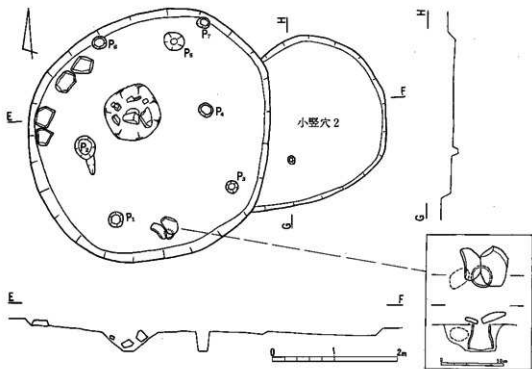
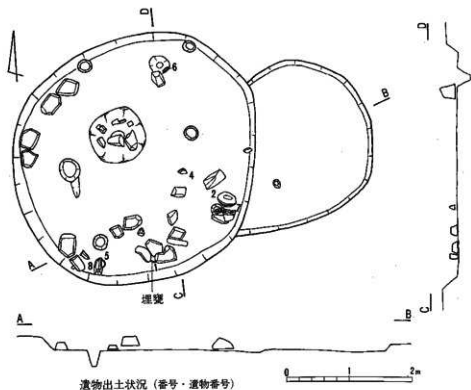


图13 第2号住居址・2号小竖穴实测图

10は結条体圧痕文の施された深鉢口縁部である。11は花積下層式に近似する深鉢の口縁部である。12~15は隆帯が貼付されたもので12~14にはきざみが施され、15には網目状燃糸文が施されている。16~38は単節及び撚りの異なった縄文を施し組み合わせ施文した深鉢の胴部片で、39は附加条の縄文を施文したものである。40は燃糸文、42~45は網目状燃糸を施文している。46、48は、条痕文を施した深鉢胴部片である。47~50は尖底となる底部片で、平底の底部は1点も見られなかった。図14-1は本遺構唯一の石器である。



図14 第2号小堅穴出土石器実測図(1:3)

本址の時期は11が花積下層式に近似すること、東信地方の中道式と呼ばれる土器群の構成に近似すること等から花積下層式併行期と考えられる。

3、第2号住居址

(1) 遺構

調査区北側、段丘端部に位置する。ローム層上で検出され、2号小堅穴を切って掘り込み、プランは3.9m×3.9mのほぼ円形である。壁高は20~30cmで、床面はほぼ平坦で、全体的に堅い。床面上からはP₁~P₇の7ヶの柱穴(P₁・径24cm・深さ24cm、P₂・30×34cm、深さ20cm、P₃・径21cm・深さ40cm、P₄・径23cm・深さ30cm、P₅・30×27cm・深さ22cm、P₆・径20cm、深さ11cm、P₇・20×17cm・深さ15cm)が検出された。P₁~P₆は主柱穴で5本主柱であったと考えられ、P₆・P₇

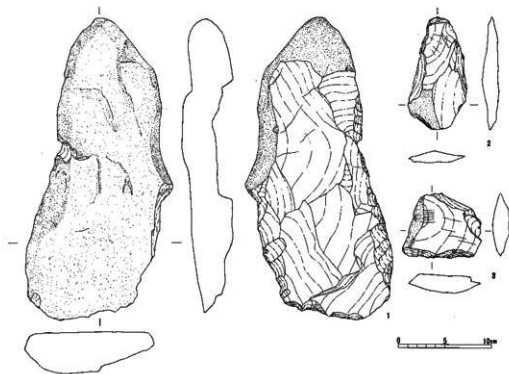


図15 第2号住居址出土石器実測図(1:4)

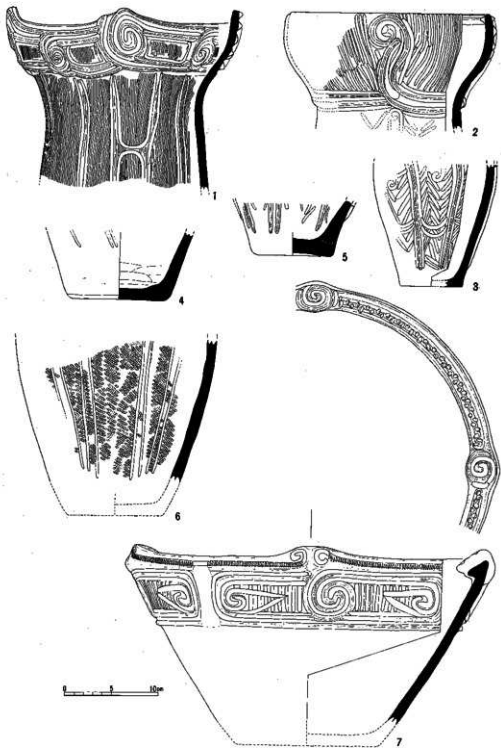


图16 第2号住居址出土土器实测图(1:4)

は壁際にあり規模もやや小さいことから補助的な柱穴と考えられる。炉は中央より北西に寄った位置にあり、一辺80cmの大きさを呈する方形石囲炉であったと思われるが石囲の石は崩され、掘り方のみが残り、内部には炉に使用された石の一部と焼土が見られた。この他に南側に逆位に深鉢を埋設し、2個の平石を石蓋とした埋室が見られた。また北西壁際には4個の平石がすえられた状態で残っていた。

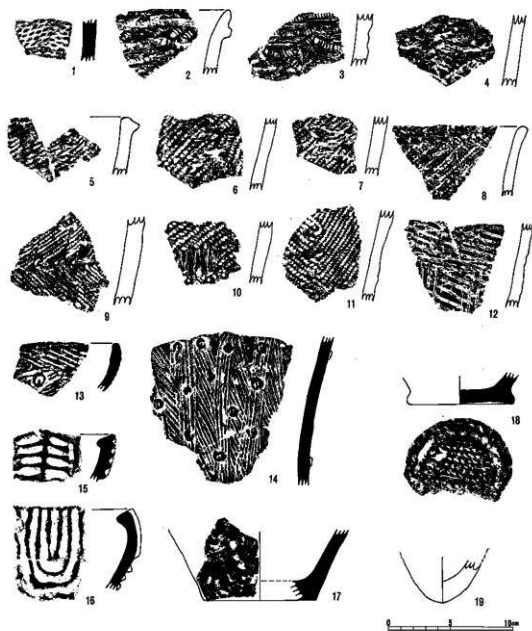


図17 遺構外出土器拓影

遺物は床面上及び床面上10cm内外で多くが出土した。またP₆内からは柱の根づめに使用したのか6の大破片がさきさった状態で検出された。埋甕の西側1mでは、大形の打製石斧が立てられていたのかやや傾いて出土した。

(2) 遺物

遺物は1が埋甕で歯状工具の条線を地文にもつ唐草文系と曾利系の間中式系の土器である。2～5は唐草文系土器の綾杉文を主体とした土器である。6は縄文を地文にもつ深鉢、7は唐草文系土器の浅鉢である。石器は少なく、図15の大形の打製石斧1点(1)、打製石斧1点(2)、横刃形石器1点(3)のみである。大形の打製石斧には使用痕は認められず、ただ原石を打ち割った自然面を多く残すもので、特殊な遺物であると考えられる。

本址は遺物等からみて曾利Ⅲ式期の古い段階併行に属するものと考えられる。(島田哲男)

4、遺構外出土の遺物

住居址など遺構に伴わないトレンチ出土の遺物を一括した。遺物には土器と石器がある。

(1) 土器

土器では、縄文早期、前期、中期の土器片があり、器形の判明するものはない。図17-1は一片だけであるが早期の楕円押型文土器である。胎土焼成ともによい。2～4は多量の繊維を含む土器で黄褐色の表面に対し、断面内部は黒色を示すやや焼成のもろい土器である。2は口縁部片で口縁部隆帯上に絡条体圧痕がみられる。3も口縁部に近い破片であり同様な施文がある。5～12はいずれも胎土に繊維を含むもので、5～11には縄文が、12には交差した捺糸文

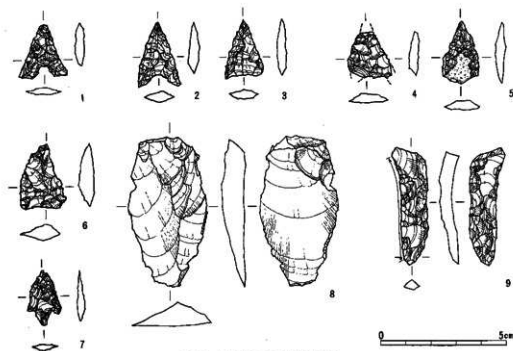


図18 遺構外出土石器実測図(1)

がみられる。19は繊維を含む尖底土器片である。表面茶褐色だが断面内部は黒色を示して、もろい焼成である。13、14は下島式土器片であり、13は内湾する口縁部片で綾杉状の平行沈線上

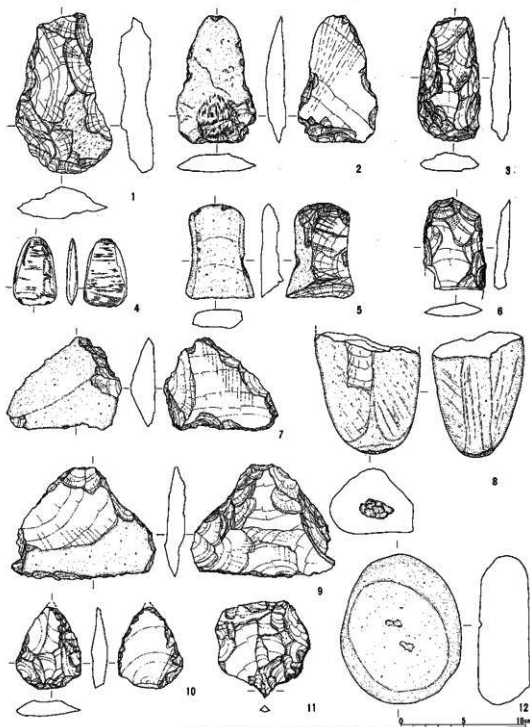


図19 遺構外出土石器実測図(2) (1 : 3)

にボタン状突起が付されている。15、16は縄文中期曾利工式併行期の口縁部片である。17、18は底部片であり、17は下島式、18は縄文中期に位置づくものと思われる。

(2) 石器

石器には、石鏃、石錐、スクレーパー、打製石斧、凹石、特殊磨石などがある。

石鏃は第18図1～7で、4と7は黒曜石製であるが他はチャート製である。8はチャート製のスクレーパー、9は黒曜石製の石錐と考えてよからう。第19図1～3、5～6は打製石斧で1は硬砂岩製、2は赤色チャート製、3、5、6は粘板岩製である。4は小形磨製石斧であり両面ともよく研磨されている。7、9は三角状を呈する大型の剥片石器であり共に赤色チャート製である。8は花崗岩製の特殊磨石で半欠である。敲石としての使用もあったとみえ打痕が残っている。図示しなかったが安山岩製の特殊磨石が完形品で出土している。10は尖端部が欠けたチャート製のポイントであり、12は花崗岩製の凹石で磨石としての使用もあったものである。11は1号住居址近辺で出土した。青色チャート製の大型の石錐である。片面加工の縄文早期末から前期の特徴的な形態であるが、巨大なところは注目される。 (山田瑞穂)

第2節 弥生時代の遺構と遺物

1、第1号住居址 (図20)

(1) 遺構

Aトレンチの中央からやや西側で、混ローム暗褐色土が、礫混じりのソフトロームに落ち込んでおり、精査の結果、床面の一部と地床炉が検出されて竪穴住居址であることが判明し、周囲を拡張して調査を続行した。土層断面の観察により遺構の掘り込み面を確認したが、ほぼローム面の高さまでしか判別できなかった。これよりも上部でロームブロックがいくつか認められるので、本来の掘り込み面はもっと上位と思われる。床面までが浅いため、プランの確定に手間取り、北と南側の一部は判然としない部分があった。

やや東西に張り出す5.3×4.6mの楕円形プランを呈する。壁は西側で急角度で立ち上がり、東側はゆるやかであるが、壁高の最大が20cmと残存部分が少ないため明確にならない。床面は平坦で、炉の周辺はたたきしめられたように硬化しているが、周辺は軟弱である。床面には

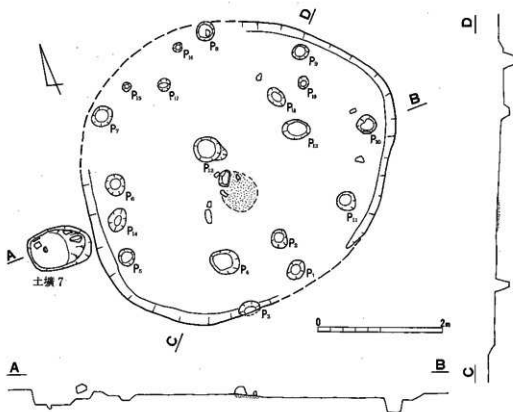


図20 第1号住居址実測図 (1:3)

大小多数のピットが穿たれている。壁際の $P_1 \sim P_{11}$ および中央の P_{12} が、深さ30cmと深いので主柱穴と考えられる。壁際に、全体をほぼ八等分する位置で配置されている。 $P_1 \sim P_4$ は出入口の構造に関する柱配置と思われ、 P_{12} は中央部の支え柱であろう。他のピットは性格が不明確であるが、 $P_{13} \sim P_{16}$ などは補助柱穴の可能性がある。中央やや南寄りに地床炉が位置する。地床炉は床をわずかに掘りくぼめて構築し、径60cmほどの円形を呈しており、数cmの厚さで焼土と炭化物が堆積していた。炉の西側に接するように火熱を受けた角礫が1個置かれている。周囲にいくつかの礫が検出されているが、火を受けた痕跡は認められず、炉の構築材かどうかは明確にならない。

炉から北東へ約1m程の位置の床面上から、横につぶれた状態で甕(図21-1)が出土したのをはじめ、覆土からの遺物の出土が多かった。

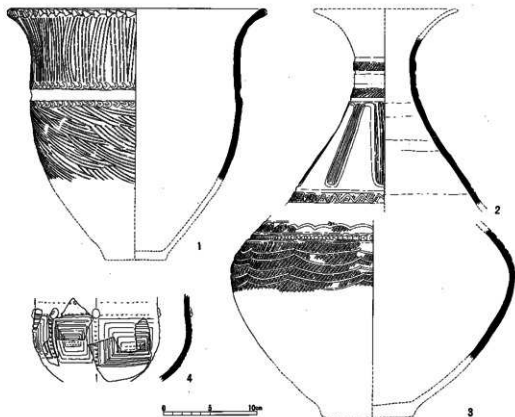


図21 出土土器実測図(1:1号住居址, 2・3:7号土坑, 4:トレンナ出土)(1:3)

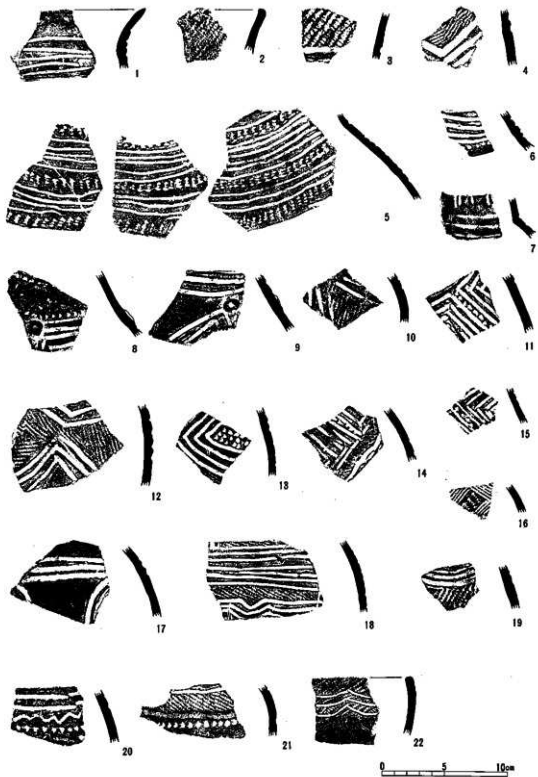


图22 第1号住居址出土土器拓影(1)

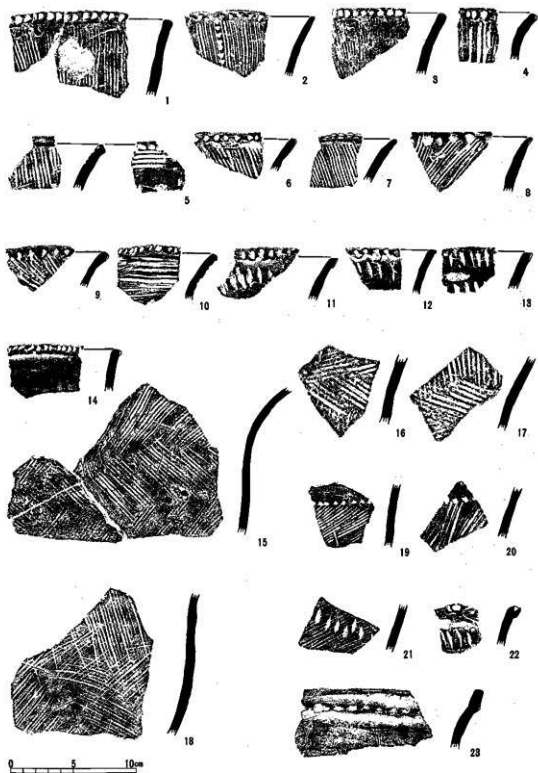


图23 第1号住居址出土土器拓影(2)

(2) 遺物

出土土器は、細片が圧倒的に多く、壺形土器および甕形土器がほとんどである。

壺形土器(図22-1~21)は、器形全体のわかるものはない。1は比較的太首の壺の口縁部であり、頸部に棒状工具による横位の太沈線が巡り、口唇部に軽く縄文が転がしてある。2から4は細頸壺の口縁部と頸部である。縄文と太沈線で施文されており、2は受口状に近い形状を呈する。頸部から胴部にかけては、大きく張り出してそのまま最大径部分に至るもの(5・6・8・9)と、7のように屈曲部から急激に張り出すものに二大別される。棒状工具あるいは歯状工具(16)による平行沈線を使って、菱形区画文(8~16)や円弧文(17・19)を描いたり、横位に帯状の区画(5・18)を施したりしている。その間に縄文(10・12・18・19・21)、棒状工具(8・11・13~15・20・21)や歯状工具(5・16)による列点文、ボタン状突起(8・9)などを組み合わせて充塞したり、ヘラミガキ(17)が施されている。底部片もいくつか認められるが、壺形土器の底部として摘出できるものはない。

鉢型土器(図22-22)が1点みられる。縄文の上に棒状工具で重円弧文風に施文し、胴部から下は無文になるようである。

甕形土器のうち、ほぼ器形全体のわかるものは1点(図21-1)のみである。大きく開く口縁部から、わずかに張りをもつ胴部を経て底部に至る。5条の歯状工具による条痕文が施されるが、1条の幅広の沈線とその上下の竹管を用いての列点文により区画され、上部は縦位に下部は斜め方向の条痕文になる。そのほかの甕形土器(図23-1~21)は、器形は断片的に理解できる。口縁部(1~13)からは、大きく開く(1・4~7)ものと、ゆっくり立ち上がる(2・3・8)ものの、二つの器形にわけられそうである。歯状工具による条痕文が施される例が多く、縦位(1~5)斜位(6~9)横位(10)と施文方向にはバラエティーがある。ほとんどの口唇部は棒状工具あるいは歯状工具(7)で列点文が施されている。5のように内面に施文されるものもあり、歯状工具の列点文が特徴的にみられる。ヘラ状工具により列点文(11~13)が施されたり、無文(14)のものもあるが、14は広口壺の可能性もある。胴部は、横位に条痕文を施しており(15~18)、その上に列点文を巡らしている(19~21)ものもみられる。23は縄文時代に属する土器片であろう。

次に石器(図24)であるが、出土数は土器と比して少なく、縄文時代の混入の可能性のあるものもみられる。内容は打製石斧3(1・2)磨製石斧1(3)打製石包丁1(6)礫器2(4)磨石1(5)である。1は硬砂岩製の、片面に自然面を残す打製石斧である。3は基部が部分的に欠けている蛤刃状の刃部を持つ磨製石斧であり、先端には刃こぼれを含む使用痕がみられる。4のように礫を部分的に打ち欠いて使用したと思われるものが存在する。6は自然面を残す硬砂岩を整形し、片面に刃部を持つ石器で、遺構外出土の同形態の1点と合わせて打製石包丁の可能性を考えた。

(百瀬新治)

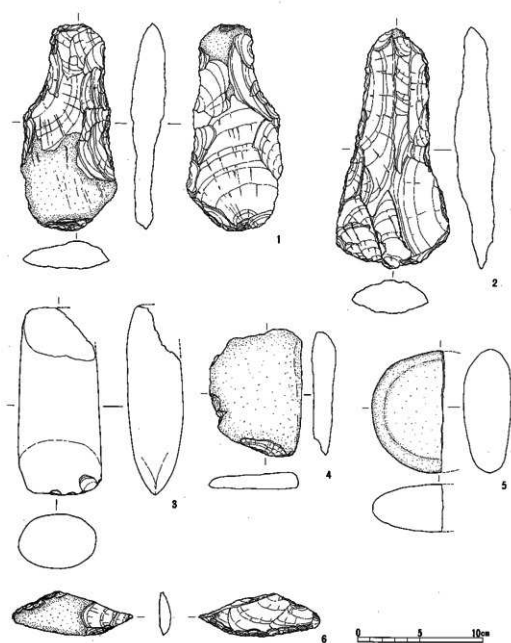


图24 第1号住居址出土石器实测图(1:3)

2、第4号住居址

(1) 遺構

遺物が多出することから、Aトレンチの東側にわずかにかかって検出され、A'トレンチが拡張されてその存在がはっきりした。抜根による擾乱が激しく、なかなかプランが明確に検出できなかった。ルーム面まで掘り下げてようやくその一部が検出されたが、壁や床の擾乱は顕著であった。

東側が少し張り出すが、ほぼ径が4.3mの円形プランを呈している。壁は南半分で明確に検出され、高さ約20cmを測り全体にややゆるやかな傾斜である。北半分は擾乱が激しく、ゆるい傾斜の壁が部分的に確認できるだけである。床面は北東にむかってわずかに傾斜しており、中央から北・西部分に堅緻なところがある。床面には全部で15個のピットがあるが、木の根や擾乱も多く、柱穴などの判別が難しかった。P₁～P₄を位置からみて支柱穴と考えたいが、P₁をのぞいては深さ15cm程度と浅いなどの問題も残る。他のピットのうちP₅・P₆・P₁₁～P₁₄は深さ30cm程度と深い点を考えると柱配置は別の状況になる可能性がある。中央やや南寄りに床をわずかに掘りくぼめた地床炉が存在する。炉のなかは良く焼けており、その範囲は径50cm程の円形になる。

本址からの遺物出土量はきわめて多かったが、そのほとんどは床面よりも10cm以上浮いた状態での出土であった。床面上およびピットから、少量の弥生時代の土器片が出土している。

(2) 遺物

土器片は細片が多く、器形全体を復元できるものは存在しない。

壺形土器(図26-1～31・33、図27-14・15・20)では、細頸壺が多くみられるが、口縁部の破片は少ない。口縁部では、外面に縄文や条痕文を施し、内面に歯状工具による列点文や口唇部に縄文を転がすものがみられる(図

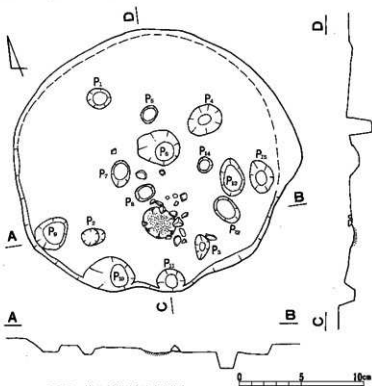


図25 第4号住居址実測図

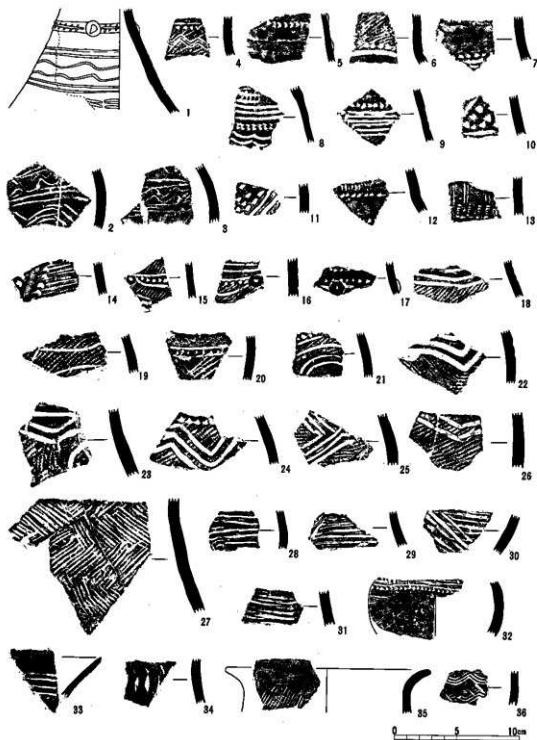


图26 第4号住居址出土土器拓影(1)

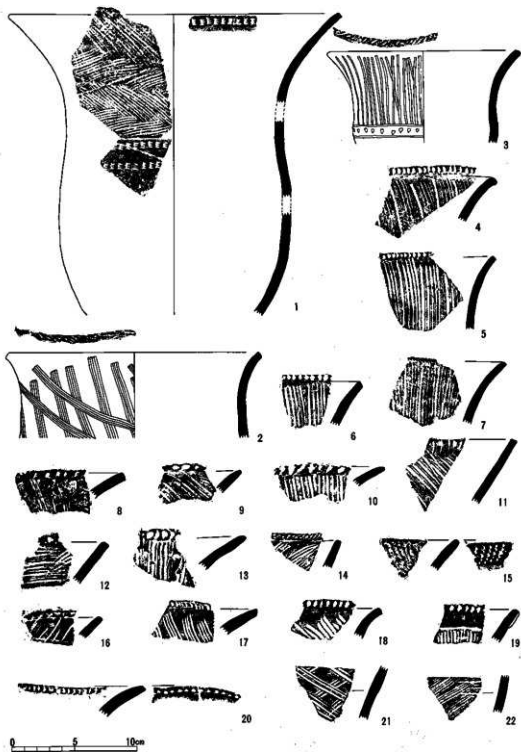


图27 第4号住居址出土土器拓影(2)

27-14・15) 33は口唇部に刻目を施しその下に棒状工具で4条の沈線を巡らし、さらに刺突文を一周させている。頸部から胴部にかけては、櫛歯状工具による横羽条の条痕文(27)または条痕文様沈線(28-31)と、棒状工具による太沈線や縄文による区面文を有するものに大別される。頸部(1-10)には、沈線を平行あるいは波状に巡らしたり、縄文を転がした隆帯や列点文を巡らしたり、ボタン状突起や刺突を施すものがある。胴部は太沈線と縄文により、菱形や円弧状に区画されるものが目立つ(11-25)。櫛歯状工具による列点文(13)と棒状工具による刺突文(11・14)、ボタン状突起(15・16・17)などが多用される。

壺形土器(図27-1-13・16-19・21-22)は、すべて各種の櫛歯状工具による条痕文が施される。1は口縁部を大きく開き、胴部があまり張らないで底部にいたる器形である。最大径部分より少し上で、3本の櫛歯状工具による列点文を2条巡らし、そこより上部は5条単位の横羽状の条痕文を施し、下部は無文とする。2のように口縁部をあまり大きく開かない器形もみられる。口唇部に棒状工具により刻目を施すものが多く、へら状工具による刻目(11)や縄文を転がすもの(2)もわずかにみられる。頸部にかけての条痕は、縦位(5-8・10)斜方向(9・11・14・16-18)が多く、横位(12)も存在する。19は折り返して肥厚させた口縁をもち、壺形土器になる可能性がある。胴部の破片は、横羽状の条痕が多く、格子目状のもの(21)や不規則なもの(22)もみられる。2はやや小形の土器で、胴部がやや張り出す。胴部に2条の沈線の間に列点文を施し、その上部は縦位の条痕文、下部は無文を施す。口唇部に縄文を転がしている。

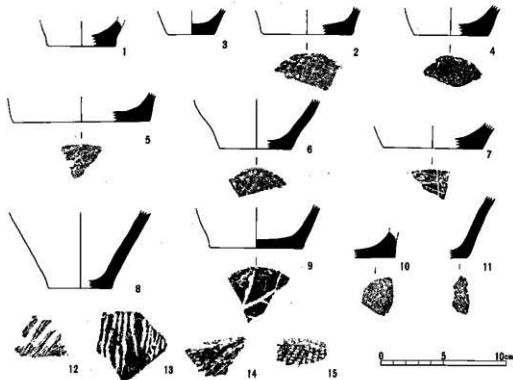


図28 第4号住居址出土土器拓影(3)

底部(図28-1~11)からは器形を明確にできるものはなかった。木葉圧痕(7・9)と布圧痕(2~6・8・10)が認められる。縄文時代の土器片(図28-12~15)と弥生時代でも時期を新しくする可

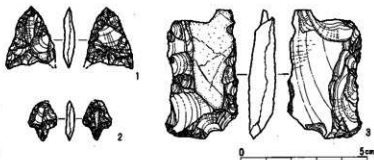


図29 第4号住居址出土石器実測図(1)

能性のある土器(図26-35・36)などが混在していた。

本址から出土した石器(図29・30)は打製石斧4、剥片石器4、石鏃2、石匙1、敲石3、磨石1の計14点である。しかしすべてが本址に帰属するものではなく、縄文時代の混入が考えられるが、それを特定することはできない。石鏃はいずれも黒曜石製であり、1のように比較的大きく二等辺三角形を呈するものと、きわめて小さい有柄の2がある。3はチャート製の石匙であり、混入と思われる。4から6は打製石斧の範疇と考えた。6のように自然面を残した大型品が特徴的にみられる。7から10は頁岩の剥片にわずかな加工痕を残す、礫器あるいは剥片石器であろう。9は打製石包丁とも考えられる。敲石とした12・13も部分的に使用痕の認められる石器であり、剥片石器とともに該期の特徴的な石器になる可能性がある。

(降旗俊行)

3、第7号土壌

(1) 遺構

1号住居址に隣接して位置し、平面形は100×70cmの楕円形を呈する。(図20)深さは約25cmを測り、底面はほぼ平坦であるが、東側は一段高くなっている部分がある。埋土はロームブロックを含む暗褐色土の単一層であり、人為的埋没と考える。土壌の東側部分、底面から10cm程浮いた状態で、一辺20cmほどの角礫が出土し、その西に隣接する位置に弥生式土器の壺の頸部より上(図21-2)が、一部が礫にかかるようにして正位の状態出土した。さらに、同じレベルで壺の胴部大形破片(図21-3)が、やや西に傾きながらもほぼ水平に、表面を上にして出土している。そのほかの出土遺物は、縄文土器をのぞくと、微細な土器片がわずかにみられるのみである。

(2) 遺物

角礫とともに出土した壺(図21-2・3)は、頸部に太沈線をまわし、その間を縄文で充填し、その下をへら描き沈線で区画して内を沈線を「のれん状」に垂下させる2と、縄文地文の上に刺突文を一周させ、さらに太沈線を連続円弧文風に加えた3がある。胎土や焼成などは良く似ており、同一個体とも考えたが、文様からは2は栗林Ⅱ式、3は栗林Ⅰ式に類似しており、別個体が一つの土壌に埋納された可能性を考えた。

(百瀬新治)

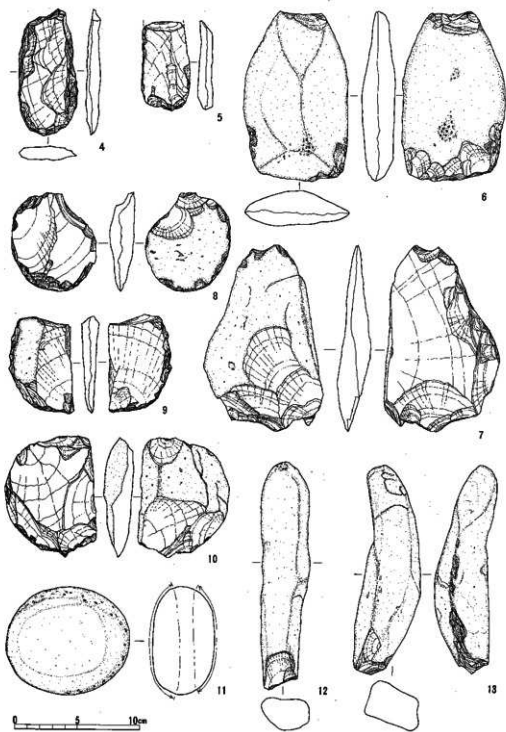


图30 第4号住居址出土石器石砾实测图(2) (1:3)



图31 淮阴外出土土器拓影(1)

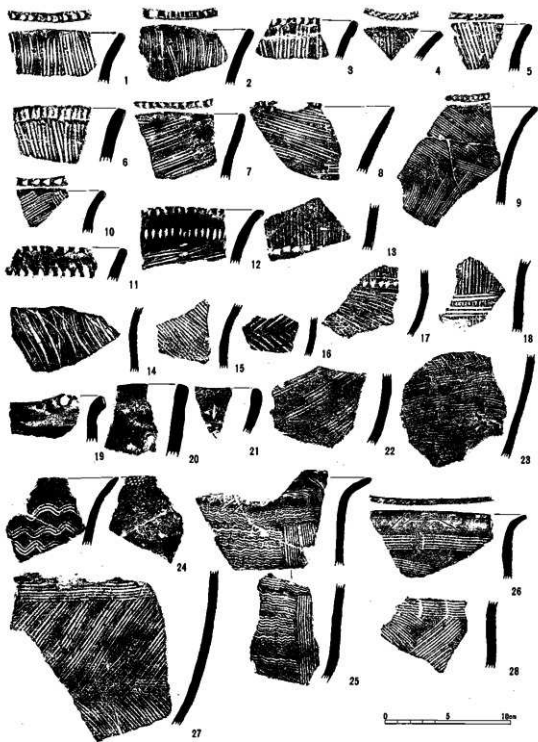


图32 澄城外出土器拓影(2)

4、遺構外出土の遺物

(1) 土器・土製品

破片が大多数であるが、多量の弥生土器が遺構外から出土した。

壺形土器(図31-4~41)は、長細頸を呈するもの(4-12・14・15)と広口のもの(16・17・20)に大別される。15はいわゆる瓢形の器形を呈する可能性がある。胴部は大きく球形に張るものがほとんどである。

口縁部から頸部にかけては、縄文を地文に、太沈線や列点文が施される例が多く、備状工具を用いる例(15・16)もある。16はやや古い要素を残している。胴部も同様に、菱形区画文などを縄文・太沈線・列点文を用いて充填する例が多い。胴部下半(38~41)に条痕が用いられるものは確認できない。1~3は器形が判然としないが、口縁内部に筋による連続刺突文を巡らしており、東海地方貝田町式土器の影響を受けた甕形土器であろう。

甕形土器(図32-1~28)は大きく開口し、胴部のあまり張らない条痕文土器(1~18)である。口唇に刻みを施し、胴部最大径付近に列点文を巡らして、横方向の羽状に条痕を施文するなどが特徴的に認められる。24~28は、百瀬式あるいは栗林式土器に近似する器形と文様構成で、やや後出的である。19~21は縄文時代の無文土器であろう。図21の4は小形の甕で、胴部を太沈線により「コ」の字重ねの文様を施し、中心は刺突文で充填している。

ほとんどは、1・4号住居址と同時期の弥生時代中期中葉に帰属する土器であり、明科町緑ヶ丘遺跡出土土器に類例が多い。また、南信の阿島式土器や尾張・美濃の貝田町式土器の影響を受けた土器も多く認められる。

土製紡錘車が1点出土した(図33-1)。約半分が残存しており、片面は4区分して刺突文を充填しており、弥生土器の文様の特徴をよく示している。

(2) 石器

弥生時代の石器として明確に類別できるものはきわめて少なく、磨製石斧と打製石包丁が各1点ずつ(図33-2・3)指摘できるのみである。2は凝灰岩製の扁平片刃石斧であり、3は1号住居址出土の硬砂岩製打製石包丁と類似した形態を持つ。

(百瀬新治)

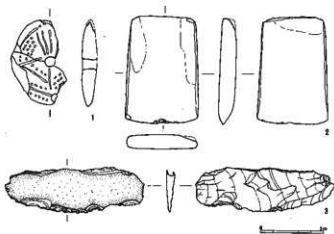


図33 遺構外出土土製品・石器実測図(1:3)

第3節 その他の遺構と遺物

1、第1・2号集石
調査地区内の2か所に炭化物をともなう集石が検出された。いずれも長径100cm短径70cm程度の楕円形を呈しており、深さ10cmほどの皿状の掘り込みをもつ。中には拳大位の角礫が詰められており、

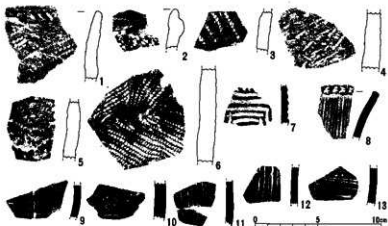


図34 第1号集石出土土器拓影(1:3)

中央は約30cmの厚さで盛り上がり、周辺に向けて薄くなっていく。礫の間に炭化材が混じっており、礫の中にも火熱を受けた痕跡が認められる。形態からは縄文時代の集石炉が想定されるが、第1号集石の出土遺物(図34)には縄文土器と弥生土器がほぼ同量、礫と炭化物に混じって認められた。時期、性格ともに明確にできない遺構である。(平林 彰)

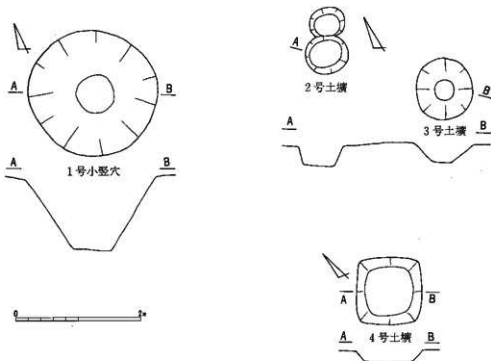


図35 小竪穴・土壙実測図

2、第1号小竪穴

調査地区の南側部分で、径200cmほどの円形の掘り込みが検出された。(図35)擦り鉢状に深く掘り込まれており、最深部では深さ140cmを測る。断面の観察からは、ほぼ正円にきちんと掘られており、埋土の堆積はレンズ状を呈し自然埋没と思われる。出土遺物は、微細な土器片がわずかに認められるだけで、時期を特定することはできない。第二次世界大戦中の松根油採掘に関わる可能性も考えられるが、形状からは別の遺構の可能性が高い。

3、第1～6・8号土壙

規模や形状の異なる小さな掘り込みがいくつか見られた(図5・35)。しかし、7号土壙を除いて、時期や性格の明確になるものは認められない。形状は円形あるいは楕円形を呈するものが多いが、4号土壙のように方形の掘り方を持つものもある。深さ20cmほどと浅く皿状の断面形のもが多く、埋土は単一層である。遺物の出土はほとんど認められない。(百瀬新治)

第4章 結 語

結語の冒頭において報告書刊行の遅れをまずお詫びしなければならない。本遺跡の発掘調査は、昭和58年9月に急ぎ実施することになったため、調査団体体制も充分ではなく、また整理作業も思うように進行し得なかった。その上調査の中心になった者が転勤という事態を迎えるに至り、一層の困難さをもたらしたことは事実である。しかし報告書の遅れは担当者の怠慢と言わねばならないものであり、村当局、教育委員会並びに発掘調査に関係された方々に心からお詫び申し上げる次第である。

すでに前章迄に記したが、社会福祉法人老人ホーム建設地である調査範囲から、縄文時代住居址2軒、縄文時代小竪穴1、弥生時代住居址2軒の他に小竪穴、土壌、集石の検出があって、いくつかの新知見を得ることができた。以下、それを記して、まとめたい。

まず縄文時代早期末から前期初頭にかけての第3号住居址と小竪穴2である。

この時期の遺物を出土した遺跡としては、山間地で安曇村番所の位沢遺跡、奈川村黒川渡の学間遺跡、平坦部では梓川村荒海渡遺跡と朝鮮原遺跡、三郷村小倉才の神遺跡、更に近隣では東筑山形村の唐沢遺跡、北安松川村の有明山社遺跡等があるが、南安郡下においては断片的な資料であって、その文化内容については不明と言わざるを得なかった。これは長野県全体からみても言えることであったが、上伊那郡宮田村中越遺跡、諏訪郡原村阿久遺跡の発掘調査で、その集落構成をはじめとする文化内容がようやく判明してきたところである。今回発掘調査された第3号住居址と2号小竪穴は、わずか2軒という少なさではあるが新知見を加えたことで資料価値は高いと言わねばならない。2号小竪穴としたが炉址の確認がなかったので住居址とはしなかったが縄文中期住居址に切られた部分にあったかも知れず、規模からしても住居址とみなしてよいものではないかと考えられる。

竪穴住居址は楕円形プランで規則性をもった主柱穴はみられない。出土遺物には土器と石器があり、土器は織椎を含む一群と含まない東海系の土器に二分される。織椎土器は絡糸体瓦痕文、柵糸文、羽状縄文がみられるものであり、尖底をなすものがある。石器は打製石斧、磨製石斧、石鏃、石錐、石匙、スクレーパー、横刃型石器、剥片石器、特殊磨石、凹石等であり、その内容は他遺跡に似ている。

本遺跡の上流500m程の地点に調整池北遺跡があり、また対岸の黒沢川左岸遺跡（東小倉）があって、共に有尾式土器を出土していることから、縄文早期末から有尾期にかけての期間、相当広範囲にわたって生活の拠点があったことがうかがわれる。

次に生活がみられたのは今回調査では縄文時代前期末と中期中葉の時期である。下鳥期の遺構の確認はできなかったが、中期の住居址1軒を検出し得た。最盛期を迎える中期集落の一端をみせてくれたわけである。

弥生時代に至って新しい文化の移入が本遺跡に見られ、よい資料提示となったことは、今回

調査の最大成果といえよう。それは、第1号住居址と4号住居址の検出である。米作りと金属器をもった弥生文化の本郷への移入と定着やその文化内容を究明する中で欠かせないものを得たわけである。

調査の遅れている南安曇で弥生時代の住居址が発掘調査されたのはこれが初めてでありその意味でも記念すべきものといえよう。

竪穴住居址は2軒とも楕円形を呈するプランで中央寄りに地床炉があり、床面上に壁にそって柱穴が確認されている。松本市横山城遺跡の住居址も同様で、この時期の住居址の在り方を示しているといえる。

出土遺物は既出のものと同出土のものを合わせると土器、土製品、石器、石製品がある。土器は条痕文をもつ甕形土器と壺形土器、栗林式土器の特徴をもつ壺形土器等があり、弥生中期中葉から後半に比定されるものである。

石器には、石鏃、打製石斧、抉入石斧、太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁があり、土製品は紡錘車、石製品は石戈である。これら出土遺物から示唆される問題がいくつかある。まずその一つは米作りである。米作りがあったことを実証するためには、炭化米など粃が存在すること、水田址が発見されること、稲作りに必要な道具の存在が確認されることであろう。本遺跡では、土器片に籾痕があり、ここでこの土器が作られたものであれば粃の存在を示すことになるが、他から持って来た土器であれば、そうとは言えない。しかし粃を知った人達であることは推察に苦しくない。ところが本遺跡では石包丁の出土がある。今回の調査でも打製石包丁として使用できる石器がある。石包丁は稲の穂を刈り取る農具とされていることから、米作りに関する資料がいくつかそろっていることになり、本遺跡の人達も稲作りをしていたと考えたい。それでは水田はどこにあったのか。水稲でなく陸稲であったのか。むずかしい問題である。住居址は黒沢川右岸段丘沿いにあり、そこはかつて黒沢川が上長尾地籍へ流路を変える地点であった。この地点の河岸段丘が「く」の字状に屈曲し、黒沢川が広くなって低湿地を形成している。水田耕作が可能な地であるが、はたしてどうであったか。出水による氾濫という不安を常にもった地ではある。

次に土製紡錘車の出土である。紡錘車は輪の回転を利用して糸に撚りをかけるもので、この出土は糸をつむぎ機織りをして布にすることを示す資料となる。事実、本遺跡出土の土器底部には目の細かい布の圧痕があって注目されていた。本遺跡と同時期の神林境塚、明科みどりヶ丘の岡遺跡の土器底部にも同様の布痕があり、かねてからの疑問を解決させてくれる資料となった。土器底面の布痕からすれば、極めて均質な細い糸を織ったもので、高度の紡織技能をもった人達と言えよう。このような細い糸を作れる材料は何であったのか。残念ながら不明といわざるを得ない。最近の九州地方の遺跡調査で甕棺内から麻布や人骨に付着した絹織物の残欠が検出されて日本製の可能性が指摘されている。カジノキ、コーゾ、シナノキ等や原蚕からも良好な繊維がとれるので、布の原材料は機織と共に今後の究明に待ちたい。

次に弥生時代といえば金属器が問題となる。塩尻市柴宮出土の銅鐻、松本市宮瀬出土の銅鐻、辰野町樋口五反田2号住出土の鉄斧、篠ノ井犀川堤防遺跡土壙墓出土の鉄劍、鉄剣等々と県下の弥生期の金属器は出土が増加しているが南安では未だ発見はない。本遺跡からは石戈の出土がある。石戈はかつてクリス型石剣と呼ばれたものであり、銅戈を石にうつしたものである。金属器は持てないが金属器に寄せる当時の人々の気持ちを示したものとはいえないだろうか。

以上発掘調査の成果と問題点をいくつか記したが不明点のみ多い。更に本遺跡へはどのような経緯で弥生文化がもたらされたのか、そして定着せずに短期間で終わってしまったのか、その原因は何か等、疑問点もある。これらをさぐる上でも、今回の調査は大きな成果を得たことを記してまとめたい。

最後に発掘調査に参加された方々、種々お世話、お骨折りをいただいた教育委員会、そして遺物の実測、写真等に協力援助をいただいた埋文センターの諸氏に調査団を代表して心から感謝とお礼を申し上げる次第である。

(山田瑞穂)

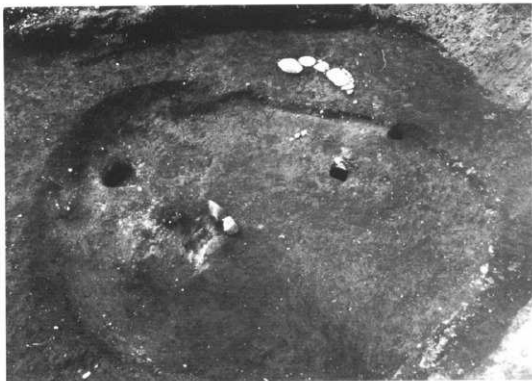
圖 版



遺跡全景（調査開始時）



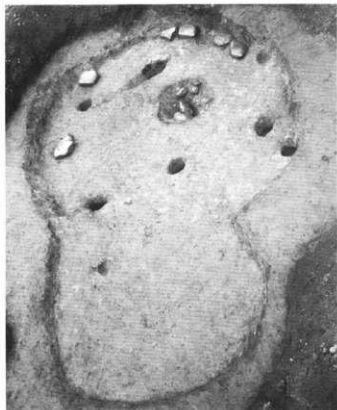
トレンチ調査風景



3号住居址(東より)



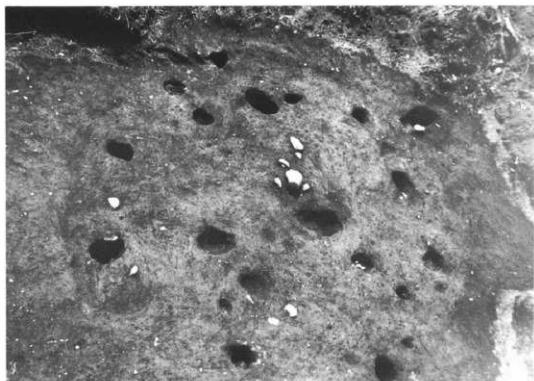
1号集石(東より)



2号住居址 2号小塚穴
(北より)



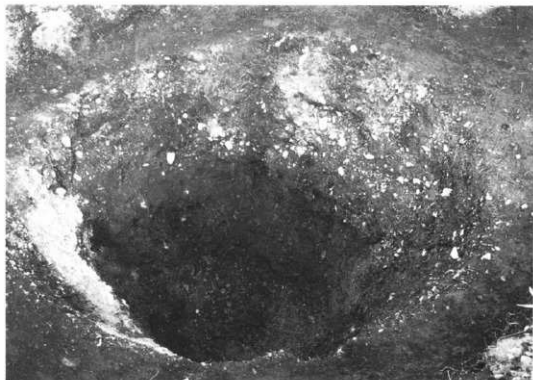
2号住居址 (東より)



1号住居址（北東より）



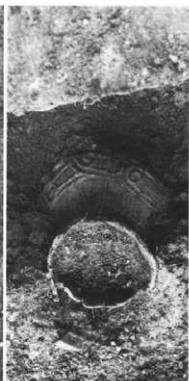
4号住居址（北より）



1号小堅穴（東より）



7号土壇（東より）



3号住居址埋裏



1. 2号住居址



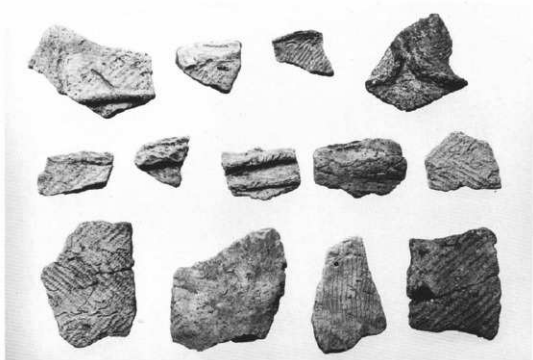
2. 7号土壇



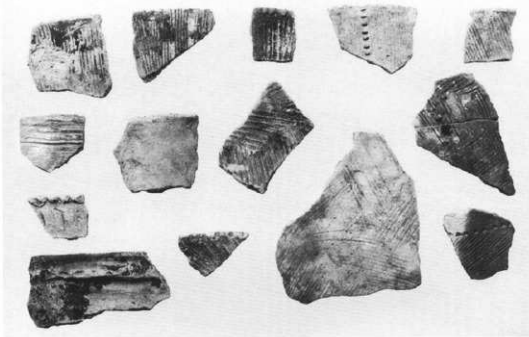
3. 1号住居址



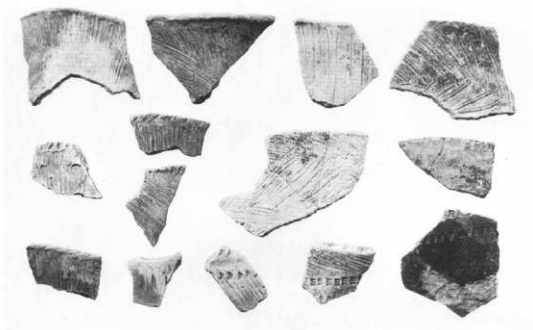
4. トレンチ出土
(1~3 約1:5, 4 約1:3)



遺構外出土縄文土器



1号住居址出土土器



4号住居址出土土器



道溝外出土弥生土器



遺構外出土石器

(約1:2)



1号住居址出土石器

(約1:3)



3号住居址出土石器

(約1:3)

凹石、磨石
(約1:3)



遺構外出土
扁平片刃石斧
(約1:3)



1号住居址出土
打製石包丁
(約1:2)



遺構外出土
土製紡錘車
(約1:2)



1号住居址出土
底部压痕



遺構外出土
板压痕



三郷村の埋蔵文化財第1集

黒沢川右岸遺跡

昭和63年3月20日印刷

昭和63年3月25日発行

編集発行 三郷村教育委員会

印刷 ほおずき書籍社

